

“ゆとり”ある輪ギク経営 ～後継者を迎える体制づくり～

みやもと あきら
田原市 宮本 憲さん
施設花き(輪ギク)

【平成25年9月13日掲載】

農業経営士協会東三河支部支部長で田原市の特産品である輪ギクを親子3代にわたって生産する宮本 憲さんを紹介しします。宮本さんは、後継者の就農には現役世代が“ゆとり”ある経営を行うことが大切だと考え、作業の省力化に取り組み、余暇を積極的に楽しむようにしています。

豊川用水の全面通水

宮本さんが住む田原市赤羽根町(旧渥美郡赤羽根町)の農業は、昭和43年の豊川用水の全面通水を境に大きく変わります。それまでのかん水設備は、自前の井戸やため池を使用した不安定なものでしたが、全面通水以降は安定的に農業用水を確保できるようになりました。中学生だった宮本さんも「渥美の農業は大きく変わる。」と就農を意識するようになったそうです。

宮本さんが就農した昭和46年当時、実家では5棟の木造温室500㎡でメロン、輪ギク、トマトの輪作を行っていました。しかし、自家採種で栽培を続けていたメロンの生育が芳しくなかったこともあり、就農10年後には輪ギクの周年経営に切り替えることを決意したそうです。



宮本 憲さん

輪ギク栽培の変遷

宮本さんは、輪ギクの周年生産に切り替える際に一つの“賭け”に出ました。当時、冬期に出荷する輪ギクは比較的低温でも開花する「金丸富士」や「天伯」といった秋ギクの加温電照栽培が一般的でしたが、花持ちが悪く、花屋や葬儀屋など、消費サイドからの評判は今ひとつでした。そこで、秋ギクの中でも花持ちが良く、消費サイドからの評価も高かった「秀芳の力」を用いた栽培に取り組みます。開花時に一定以上の温度を必要とする「秀芳の力」の加温電照栽培は農業総合試験場で開発されたばかりで、現地で取り組んでいる事例は、ほとんどありませんでした。



脇芽を除去する
“ヤゴカキ”

実際に「秀芳の力」を冬期栽培してみると、重油使用量は前出の2品種より3割程度多く、収量もやや劣っていましたが、販売単価は想像以上に高かったため、所得は増加しました。宮本さんの成功以降、「秀芳の力」の加温電照栽培は地域でも一般的なものとなりました。

現在、宮本さんのハウスでは、冬期に「秀芳の力」に比べて低温開花性のある「早生神馬」を、暖房機を使用しない夏期には、脇芽がほとんど発生せず“ヤゴカキ”の省力化につながる「精の一世」を導入しています。また、加温栽培を始めた当初は、年2回だった作付け回数も、現在では、電照とシェード(暗幕カーテンを開閉し、日長時間を調整する技術)を巧みに組み合わせて年3回にまで増やしています。

徹底した省エネ対策

宮本さんは、就農当初から「儲けは先行投資に回す」との経営理念を持っており、1,200 m²で始まった輪ギクの施設も就農 20 年後の平成 3 年には、5,000 m²を超えるまでに増加しました。



今年の冬から稼働予定の
ヒートポンプ

また、経営面積が家族を主体とした労働力の上限に達した現在では、生産コストの削減につながるよう省エネ機器の導入を進めています。特に輪ギクの栽培に用いる電照は、すべてが白熱灯から消費電力の少ない蛍光灯やLEDに置き換わっています。また、近年、価格の高騰が続く重油の使用量削減に向けて、今年の冬からバラやハウスミカン栽培で導入が進んでいるヒートポンプ式エアコンを稼働させる予定です。



LED を用いた電照

ゆとりある農業経営を目指して

上記のように施設の増設を着実にやってきた宮本さんですが、自家の労働力を超える規模拡大は避けてきました。

「親が夜の 11 時や 12 時まで忙しく働く姿を見て育てば、農家は継ぎたくないし、嫁ぎたくなくなる。後継者や若者の就農には現役世代がゆとりある農業経営を行うことが大切。」とその理由を笑顔で語ってくれました。宮本さんは、そんな自分の考えを実践するため「直挿し定植(※)」や「精の一世」の導入など省力化技術にも積極的に取り組んできました。そこで得られた余暇を趣味である船釣りの時間にあて、充実した日々を送っています。

宮本家では昨年、次男が後継者として就農したのを機に経営の見直しを行いました。高齢の両親が主に担っていた選別・選花・箱詰め作業を省力化するため、長年所属していたJA愛知みなみ輪菊部会の収穫物を個人で箱詰めし出荷する組織から同部会のばら受け出荷組織に移籍しました。これにより、出荷手数料が増えて経費は多少増加しましたが、収穫物を直接持ち込むことができるため、経営全体の労働時間は 2 割程度削減されました。



キクの“直挿し定植”



出荷を控えた‘精の一世’

この労働時間の短縮が規模拡大に繋がるか尋ねたところ、「自分の代での規模拡大も考えてはいるが、次男が技術を身につけて、そのとき規模拡大が必要だと考えれば、増やしてくれればいい。」と語ってくれました。後継者を思いやる父の姿が垣間見えた瞬間でした。

※直挿し定植・・・挿し芽を本ばに直接定植する栽培方法で、
苗場で苗を育成する手間を省くことができる。

執筆：農業経営課

取材協力：東三河農林水産事務所田原農業改良普及課